

先進自治体事例紹介①

#	自治体名	講演名
1	岐阜県飛騨市（総合政策課広報プロモーション係）	飛騨市の挑戦 飛騨市ファンクラブとヒダスケ！による地域のファンづくり

【発言要旨】

■市の概要と政策の背景

- ・飛騨市は岐阜県最北端に位置し、人口約2万1千人、高齢化率40%超の過疎地域である。
- ・観光地に囲まれているものの、観光都市ではなく製造業を中心とした産業の町である。
- ・この30年で全国の倍の速度で人口減少が進み、担い手不足や後継者不在が深刻化している。
- ・こうした状況を背景に、移住・定住に限らない新たな関わり方として「関係人口」に着目した。

■飛騨市ファンクラブによるファンづくり

- ・2017年、「飛騨市ファンクラブ」を設立し、飛騨市に心を寄せる全国の人々を広く募集した。
- ・会員は1.6万人を超え、約9割が飛騨市外在住者である。
- ・会員証やオリジナル名刺を通じてファンを可視化し、宿泊割引や市内飲食店で使用できるクーポン等の特典を提供している。
- ・名刺を配布する仕組みにより、会員自らが新たなファンを生む循環をつくっている。
- ・財源はファンクラブ会員からのふるさと納税を活用。

■交流の深化と関係人口の発見

- ・ファンの集い、バスツアー、参加型交流等を通じて会員との関係を深める中、無償で運営を手伝いたいという参加者が現れた。
- ・この取組を通じて、移住を前提としない関係人口の存在に気づいた。
- ・楽天グループや大学との研究からも、関係人口の

多くは移住を望まず、「現地での滞在」「友人知人の存在」「印象深い体験」が地域への愛着を高めることが明らかになり、関係人口施策のゴールは移住ではないと整理した。

■「ヒダスケ！」と施策の循環

- ・2020年、市民の困りごとを交流の資源と捉え、市内外の人をマッチングする「ヒダスケ！」を開始した。草刈り、農地再生、地域行事の手伝い等を全国から募集し、年間約50～60プログラム、延べ約1500人が参加している。
- ・参加者には電子地域通貨を提供し、交流と往来を促進している。これらの取組は、ふるさと納税、ファンクラブ、ヒダスケ！が連動する循環型の関係人口施策として展開されており、「うれしい・楽しい・面白い」を軸に市民とファンの声から拡張してきた点が飛騨市の特徴である。

■今後の展望

- ・関係人口施策は、計画先行ではなく、現場の声を拾い仕組みにして拡張してきた取組である。
- ・今後も、ファンや市民の声を起点に、柔軟に展開していく方針。
- ・関係人口を増やす鍵は、「うれしい・楽しい・面白い」という体験である
- ・ふるさと納税・ファンクラブ・ヒダスケ！を連動させた循環型施策を今後も強化していく。
- ・財源、交流、地域貢献を切れ目なくつなぐことが持続可能性のポイントである。

【主な質疑】

■地域の理解を効率よく得る方法は何か

- ・効率だけで解決しないが、まず商工会・商工会議所など地域のキーパーソンに正式に挨拶し、「地域のファンと一緒に増やす」という共通ゴールを共有するのが近道である。
- ・その上で、組織のトップから会員事業者へフォローしてもらい裾野を広げ、店舗には一軒ずつ直接礼を述べ、行政のビジョンを対面で説明した。
- ・キーパーソンを飛び越える動きは反発を招くため、順番を踏む丁寧な対話が結果として最も効率的である。

■参画店舗を増やすための営業訪問は勤務時間内か

- ・おおむね勤務時間内で一か月程度かけ、役割分担しながら計画的に訪問した。
- ・会長級への訪問には課長・部長に同席してもらった。
- ・時間外訪問は最小化し、事前アポで短時間面談を徹底。どうしても難しい先には客として足を運び、商品理解を深めながら会話をした。

■ファンクラブの財源は。

- ・創設初期は企業協賛で特典部分を負担してもらっていた。ふるさと納税と連携して以降は、市が全額負担する形に切替え、特典店舗も拡大した。